



トロイメ

† Fate/stay night "sakura matou" fanbook †
T R U M E R E I

arestica code:0.41

T R U M E R E I

† Fate/stay night "sakura matou" fanbook †

はじめましてこんにちは。有子瑠一です。

夏に続いたFate桜本です。

黒板がとても好きです。

つたない本ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。



穢れたまものが
足元に額ずきキスをする



汚れた私に黒い罪の雨が降る



ここは深い穴倉の底

ここは黒いわたしの底





おわっ

せーんばいっ♡



今日は腕によりをかけて
作っちゃいますから!

ね、先輩
せっかくだから



一緒にお買い物
して帰りましょう?



お、桜

今帰りか?

はい!

せ、先輩……
もう……ですか？

まだ、
外明るいですよ……？



何いってんの
着替えてから
ずっとノーブラで
乳首立ちっぱなし
だったくせに……

あ……っ♡

だ、だって……
わ、私

こっちは……
コリコリ……して……っ

はっ

あ
あ

あ

もうこんなに
濡らしちゃって……
すこいヌルヌルだよ桜
ほら……聞こえる？

あっやあ……っ

せ、せんばあい……♡



んんん

んんん

んんん

あつ……だって……
……も、早く……っ

もう待てない？
自分からおねだり？

んんん
挿入る……っ

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

あつ……
せんば……っ

あ

んんん
んんん
んんん



あつ……先輩っ
イイですか……っ？

ココっ……！

奥っ……あ
すご……っ

私だけを見てくれる先輩

もっと…
もっと深く繋がりたいの



まっ
あ
あ

あ
あ
あ



はは、コイツまだ
欲しがつてやがる

やべーな、マジで
アレなんじゃね？
こんな格好で
街中歩いてるし…

ほらもって
尻あげろって



あふ？



こりや
イイ拾いモン
したな

くっ…すげえ
締め付けてる…っ



「衛宮、知ってるか？
アイツの本当の姿を」

やめて兄さん！
それだけは……っ

貴方が私に勝てると思っ
ているの？
「士郎は私が貰うわ」

酷い——
どうして姉さんだけ……

あーっ！



きゅん……

あ……も

あ……



あ……

あ……



—
うあ？







これは夢です



……どうして

わ、私だけ
こんな……っ



ただのユメ



サクラの
罪悪感が見せる



もう嫌あ……っ

声を殺して泣くのはもう慣れた

ただ静かに眠りたいだけなのに

それは 聖杯を放棄
するという事ですか

そ……んな

ひっ

うっ

臓硯にその身体を
くれてやるという事ですか

……とじゃ
ない

違っちがウ
もう厭なの
そっぢやない

先輩が傷付くの
私が死ぬのもおじ
様のいいなりになる
のももうイヤなの
厭なだけなの
なにもかも

あーあーあー

姉さんに取りられるのも



ただわたしは

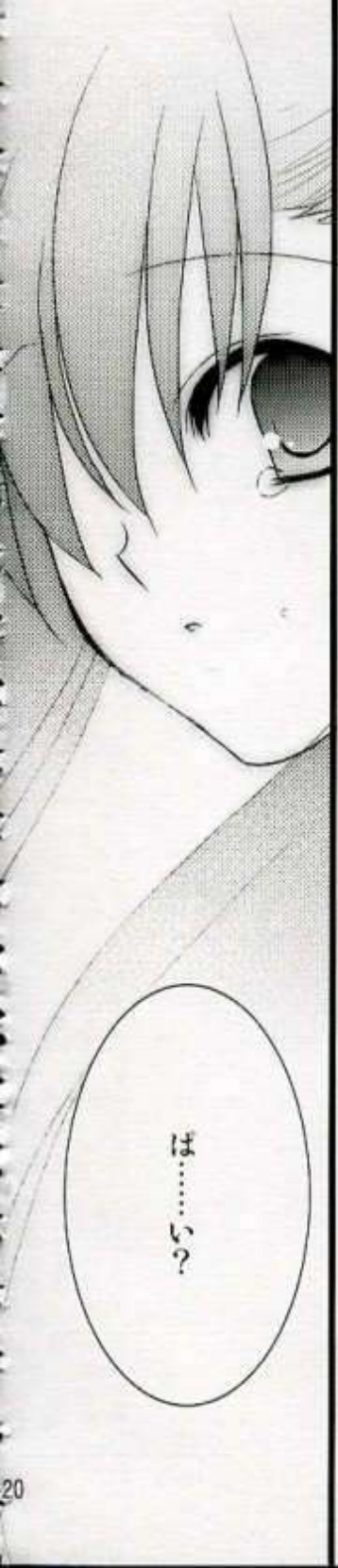
あーあーあー

静かに眠りたいだけなのに

桜

……せん

は……ん





——
ありがとう

ライダー……

この温もりは 私の半身



—
お願い



サクラ

もう少し

このおかしな世界——





トイザ

Fate/stay night "sakura matou" fanbook

私を抱きしめる この温もり



わ

私は愚かだ

わた……



サクラを想っている者が
居ることを

忘れてはなりません



貴女は一人ではありません



大空の傷女
TEXT BY EGOIST

暑い。

蝉の鳴き声と陽射しの熱が、肌をジリジリと焼いていく感覚。照り返して陽炎ができた道路。

気づけば独りで立ち尽くしていた。

いつもと変わらない商店街、今は人の姿が無い。

握りシメタ手ニ汗ガ滲ム。

誰も居ない昼下がりの商店街は、まるで死都のようだ。

私ハコノ情景ヲ知ツテイル。

突然得体の知れない何かにかられて、私は走った。

走って走って走って、逃げるように走って、追いかけるように走っ

て、結局はもと居た商店街。

私はペットショップの前に立っていた。

人の気配は無く、生き物の気配さえ感じられない。ペットショップの店先には水槽が並んでいる。

水槽の中で熱帯魚は浮かんでいた。

死滅した檻の中で小動物が廻り続ける。

—カラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラ—

その小動物すら死んでいる。

店のショウウィンドウに映る顔は、まるで別人のように瞞っていた。

その笑みを私は知っている。

—カラカラカラカラカラカラカラカラ—

無限ニ続く何方廻ル音。

硝子に映る自分は瞞う。

その姿は昏い漆黒に抱かれ血で赤く染まっっていて、あまりにも自分とかけ離れていた。

かけ離れている筈の映し身は、やはり自分なのだ。と心の何処かで自覚している。

容姿が同じだから自分なのではなく、硝子に映りこんだ自分は、私が犯した罪の具現なのだ。

罪悪も自罰も一切無く。

自責も呵責も微塵も無い。

冷水が肌を伝って流れ落ちる。

冷たいシャワーを浴びたおかげで、身体は熱を持ったように熱いにも関わらず、頭は妙に冷静になっていた。

何度目の悪夢だろうか、自分でも受け止めなければいけないと解っている。私は自分がしてきた行為に対して、向き合わなければならぬと自覚もしているつもりだ。

偶に罪に対して向き合っているつもりで、実はそうではないのかも、しれないと思ってしまう。

それでも私は自分がした事を、今も鮮明に思い出せる。兄さんを殺した。

無関係の善の街の人達を殺して、その全てを糧にした。他を蹂躪できる事を知った時、大好きな善の姉を体内で咀嚼する様を想像して恍惚としていた。

私の中に在る悪がそうさせたとか、私を変えたからとかではなく。私は憎悪の対象全てが消える事を望んでいた。

あの意志は明らかに私の物だった。

罪悪の枷が私の足首には填められている。それはリアルな重りとなって私を束縛する。

先輩は私を護ってくれた。私は彼を愛している。傍にいと凄く安心する

安心して不安になる。自分の置かれている状況と、自分のしてきた事の重みで、ここに居てはいけないのではないかと思う。

それでも、先輩が私を呼んでくれる時、不安は全て消えてしまう。愛情を確かめるように呼んで欲しい。

求めるように呼んで欲しい。私は心の底から先輩を求めている。

先輩も私を護ってくれる。だから抱きしめられて名前を呼んで貰えたとき、私は全ての不安を忘れられた。

幸せの渦中にある。

だからこそ、この罪悪感あしかせが重く冷たい。壊れるくらいに望んだ彼が、傍に居てくれる。

「先輩・・・」
不意に涙が零れた。

弱い自分に、強い先輩に、全てに申し訳なくて涙が零れ落ちる。何度こうして泣いたのかも憶えていないくらいに、私は独りの時に泣いていた。

まるで心の汗だ。

シャワーは相変わらず水のまま、雨を降らせ続けていた。雨が私を伝ってタイルに流れ落ちる。

いつそ心の汗も、罪も、全て流れてしまっていて欲しいと願う。

ジワジワと流れ落ちて、全てが排水口の中に吸い込まれていく。暗い底に流れ落ちる。

まるで私の闇のような排水口が、全てを飲み尽くしている。

残酷な暗闇と優しい光。

浴室には水の流れ落ちる音と、私の息遣いだけ。

生命の息吹も感じられない。

まるで、さっきの夢のようで、言いようもなく孤独が怖い。

水に濡れた手が赤く染まっているような錯覚に視界が歪む。

「そうか・・・」

きっと私は、もう元の場所に戻れない事が怖かったんだ・・・

だから悲しくて泣いた。

視界が揺らぐ。

浴室の灯りが眩暈に似ていて視界が真っ白になる。

ソレハ眩暈ヲ誘ウ。

全てが無に還るように混ざりあう。

悪夢心地。

ふわふわhigh high身体に力が入らない。

立っていられない事に気付いた時、私の世界が白色に塗りつぶされた。



目が醒めて、いつも感じられる気配がない。

「桜？」

彼女の名前を呼んでも返事はなく、隣に姿はなかった。

眠りについてから大分経ったみたいだが、桜が起きてからは、さほど時間は経っていないらしい。隣には桜の甘い香りだけが残っていた。

香りを感知取った瞬間、なんだか不安になる。

部屋を見回してみても、着替えた様子はない事を確認してから部屋を出て浴室に向かった。

着替えずに部屋を出ているいじょう、桜は家の中に居るだろう。

それが起き抜けなら、おそらく浴室だ。

浴室に向かう廊下を曲がった先からライダーが現れた。最近見慣れた普段着姿ではなく、本来のサーヴァントとしての姿。

「ライダー」

ライダーの腕の中には、桜が抱かれていた。

「土郎」

ライダーから差し出された桜を大切に両腕で受け取り、部屋へ戻

ることにした。

桜を寝かせてからライダーの話聞いてみると、どうやらシャワーを浴びている最中に倒れたという事だった。幸いなのは硬いタイルに打ち突けられる前に、ライダーが受け止めてくれた事だろう。

「氣を失っているだけですから、もうすぐ目を覚ますでしょう」

「ありがとうございます。ライダー」

「わたしは桜を護るサーヴァントですから当然の事です。それより土郎」

「うん。判ってる」

桜は自責を内に内にと溜めこむところがある。最近はいじぶ元氣が出てきたように見えたが、自責と自罰で相当参っていたんだだろう。

「元氣そうに振る舞ってたけど、やっぱり氣に病んでるだよな」

「そうでしょうね。結果あれだけの事になったのですから、心身へのストレスは計り知れないでしょう。それにサクラは贖罪を外に求めない。これではいつか壊れてしまう」

「その事について前々から考えてた事があるんだ。桜が目覚めたら話そうと思う」

ライダーは何かを思案するような仕草を見せて、すぐに微笑んだ。

「土郎の考えなら、きつとサクラの為になるでしょう。同意を得られたら私にも話してください。微力ですが力になれると思いますか

ら」

「そう言ってもらえると助かるよ。桜には辛い思いばかりさせて
るような気がするんだ。だから苦しみも痛みも、いつか終わりがく
る事を教えてやりたい」

ライダーは相変わらず嬉しそうに微笑みを浮かべて、こっちを見て
いる。

正直、ライダーほどの美人が微笑んでこっちを見ると気になって
しょうがない。

「俺、何か変な事言ったかな？」

「いいえ。変な事は言っていません。ただ、サクラが羨ましいと
思っただけです。わたしは生涯において、そのような事を言われた
事がありませんでしたから」

「ライダー」

「サクラが起きる前にわたしは戻ります。士郎、サクラをお願いし
ます」

「判った」

俺の返事を聞いて満足したように頷き、ライダーは音も気配さえな
く部屋を退出していった。

ほどなくして桜は目を醒ました。

「先輩。私……」

「桜、気づいて良かった。浴室で倒れそうになったところをライダ
ーが助けてくれたんだ。ストレスから体調を崩したんだろうって。
後でライダーにお礼言っておけよ」

「はい」

「桜」

「はい」

「辛かったろ。俺、気づいてるつもりで、気づけてなかったな。桜
がこんなに悩んで泣いて苦しんでたのに、俺は何一つしてやれてな
い。桜を護るって決めたのにな」

「そんな事ないです。私、先輩から沢山のものを貰ってお返しもで
きない。いつも凄く元気づけられてるんです。だから、そんな風に
思わないでください」

必死に弁解する桜が凄く可愛い。

「ありがとう。でも、これは言わせてほしい」

隣合って座りながら、お互いを見つめる。

「桜。もし辛くて泣きたい時は遠慮なく泣いてくれ、俺も辛さを一
緒に分かち合うよ。だから辛い時は言ってくれよ」

「先輩」

「それから、これは提案なんだけど。俺と桜とライダーの三人で旅
に出ない？」



「旅ですか？」

「そう、旅をしながら各地でボランティアをするんだ。三人で少しづつ贖罪していこう。悩むより何か行動した方が気分楽になると思うんだ」

桜の目に涙が浮かんでいた。

「先輩。本当にありがとうございます。私なんかの為に」

「俺は桜を護る。これはいつまでも変わらない。それに、衛宮士郎にとって間桐桜が一番大切なんだよ」

「はい」

桜は一言だけ応えて、その頭を俺の右肩に預けてきた。

俺はそっと抱きとめて、桜の体温を感じる。

閑寂の夜。

闇の中で病む事なく降り続く霧雨は心模様。

罪に埋もれて謳った唄。

過去を綴って霧散した。

君の方に手を伸ばして感じる香り。

君の傍に隣り逢えるように傍に居る。

君の過去が止まる時計のように病む事なかれ。

君を護り共に進めるように歩みだそう。。

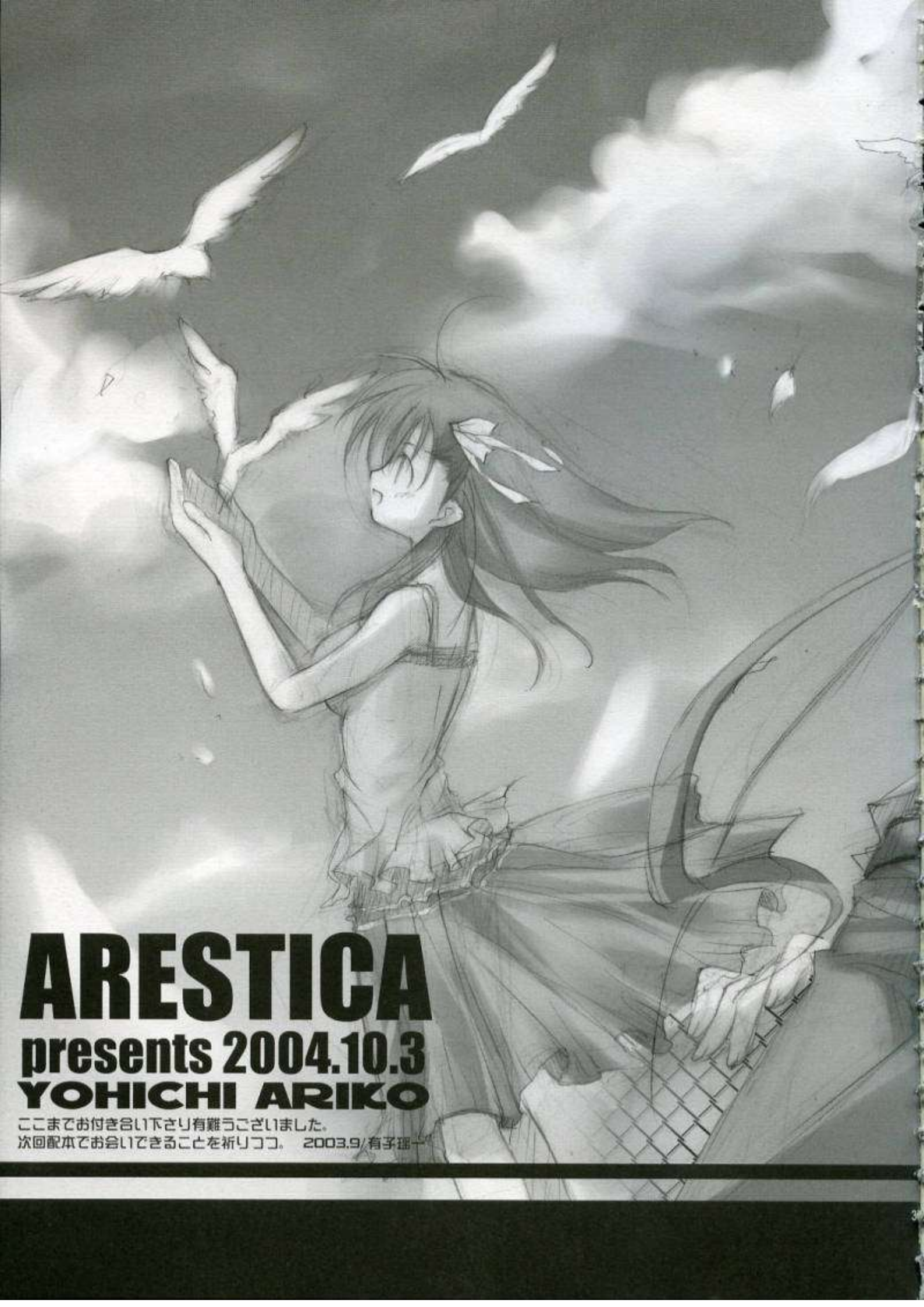
GUEST COMMENT

皆さん、お久しぶりです。謎の馬の骨、餌恋です。
今回も辛気臭いお話で申し訳ないなあと思いつつ書きました。
しかも独白形式なので読んでる方はツマラナイんじゃ・・・
などと怯えております。
この話は Butterfly 適度に楽しんでいただけると幸いです。
続きもあるのですが、長いので反響があればやるかも・・・
短いですがこの辺で失礼します。

>>> RESS

兄チャマから再び小説をいただきました / 有難うございます /
前回挿絵欄に合わなかったので、リベンジしました。
文字組み終わった後に追加校正したときは「き、気付かなかった事にしよう / 」と
一瞬思った事はひみつ / しかし凄いタイトルだねコレ (笑)





ARESTICA
presents 2004.10.3
YOHICHI ARIKO

ここまでお付き合い下さり有難うございました。
次回配本でお会いできることを祈りつつ。 2003.9/有子瑠一

■ トロイメライ ■
■ 2004.10.3 ■
■ ARESTICA/有子瑤一 ■

禁・無断転載



ARESTICA
presents 2004